

大学の世界展開力強化事業（令和元年度採択）

令和2年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	東京外国語大学		
主たる交流先	EU		
事業名	歴史と公共圏を鍵概念として日欧相互理解を深める国際人材育成プログラム		
事業責任者 <small>※交替年月日は変更があった 場合のみ記入</small>	(氏名)	青山 亨	(所属・職名) 大学院総合国際学研究院長
	(交替年月日)		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 <small>※追加調査を提出した 大学のみ記入</small>	大学名		国名
	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		

大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL
※日本学術振興会ホームページにおいて、各事業のリンク先として使用

<http://www.tufs.ac.jp/hips/>

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で各1ページ以内】

本事業における2019年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

プログラムの内容

①交流プログラムの内容

初年度にあたる2019年度は、次年度から始まる本格的な学生の派遣・受入に向けたプログラムの基盤形成が活動の中心となった。特に10月から2月にかけて、コンソーシアムを構成する日・EU5大学の間で教職員の活発な往来があり、協力体制の強化が図られた。

他方で、COVID-19の影響により、3月に予定していたフィレンツェ大学および新リスボン大学への教員派遣は断念せざるを得なかった。相互訪問を通じた交流は来年度以降に持ち越されたものの、状況の変化に対応するため、従来からのメール協議に加え、2019年度末よりビデオ会議を導入し、課題解決に向けた議論を交わすなかで、コンソーシアム内での教員間の連携はむしろ強化されている。

②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

2月に本学において、コンソーシアム機関の代表者による会合を開催し、カリキュラムや単位互換などに関する意見交換を行った。会合では、各校の授業やインターンシップ等の内容を相互に把握し、カリキュラムに関する課題を共有した。各校が課題を持ち帰り、実施プログラムの内容調整等を行うことで、教育の質の向上を図っている。

③外国人学生の受け入れ及び日本人学生派遣のための環境整備

10月に参加希望者に向けたプログラムの説明会を開催し、チラシやパンフレットを通じた周知に努めたが、COVID-19の影響で紙媒体での広報計画に遅滞が生じた。また、応募希望者からの個別相談に応じるなか、学生らが渡航にあたり不安視している点や要望等も把握しつつある。参加希望者にきめ細やかな個別対応を行うなかで学生のニーズを把握し、支援体制のさらなる拡充につなげたい。

④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

ウェブサイト「公共圏における歴史」を立ち上げ、事業内容につき英語と日本語で発信している。コンソーシアム間での情報共有や交流のオンライン・プラットフォームの構築がいっそう重要になるという認識を各大学間で共有しており、具体化に向けて話し合いを続けている。

【特に優れた取組】

2月に本学で開催したコンソーシアムを構成する各大学の代表教職員による会合をはじめ、10～2月にかけて大学間での活発な往来があり、学生の派遣・受入に向けたプログラムの基盤形成が進んだ。ウェブサイト「公共圏における歴史」を立ち上げ、事業内容について日英2ヶ国語での情報発信を行った。

(2) 特記すべき成果

①交流プログラムの内容

・10～12月に、EU側の拠点校である中央ヨーロッパ大学（CEU）に教職員を複数回派遣し、ダブルディグリープログラムの実施に向けた協議を重ねた。また「公共圏における歴史」という本事業の主題についての理解を促進するため（教育、アウトリーチ活動）、次年度の公開シンポジウム開催に向けた準備を行った。

・本学で2月に行われたコンソーシアム会合の際、学内施設のみならず、インターンシップの候補となる博物館や、大学周辺の「公共圏における歴史」に関する史跡を訪問し、大学キャンパスにとどまらない学修・交流の可能性を確認した。

②質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成

・1月、本学とCEUを中心とする5大学により、プログラム運営、カリキュラム、学位等について規定したコンソーシアム協定を締結した。

・同協定の枠組みに則し、本学におけるダブルディグリープログラム実施に向けた学位、単位認定、成績評価基準等について、代表教員と教務課の間で協議を重ね、問題解決に努めた。

・本学に外部有識者による外部評価委員会を設置し、事業の健全な推進に向けた体制を整えた。

③外国人学生の受け入れ及び日本人学生派遣のための環境整備

・参加学生がJASSOまた国際交流会館（学生寮）等の支援を受け、学業に専念できる環境を整えた。

・本学にプログラム実行委員会を立ち上げ、英語授業や実習・インターンシップの準備など、受け入れ基盤の確立に向け、検討を重ねた。

④事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及

・本学の特色を英語で紹介する動画を作成し、本学のみならず、コンソーシアム校のウェブサイトにおいても公開し、周知を図った。

・パンフレットやリーフレット（英日）を作成し、ウェブサイトでも公開した。

2. 交流学生数の実績等【(1)～(3)はそれぞれ1ページ以内、(4)は2ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計1	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計2	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (A=小計1+2)	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

② 日本人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (B)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する 実績の割合 (B/A)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

初年度にあたる2019年度には派遣は予定していなかったことから、2020年9月に予定される初回の派遣に向けた準備を進めた。

11月、12月、1月に中央ヨーロッパ大学（CEU）に本学教職員を派遣し、大学施設や学生の受入体制を確認した。また、3月に予定していたフィレンツェ大学および新リスボン大学への本学教員の派遣はCOVID-19の影響により中止となったが、CEUをハブとして、学生の派遣に際し必要となる実務的な情報を集約する作業を進めている。

本学では10月にプログラムに関する説明会を開催したほか、潜在的な応募者となる2020年度博士前期課程入学試験合格者全員に案内を送付した。また、コンソーシアム協定の学生募集および選抜に関する規定に基づき、本学での2020年度参加者募集に関する要項を作成し、ウェブサイトで公開したが、その後、COVID-19の影響により、応募の日程・方法等に関し再三の変更を余儀なくされた。

CEU側の受入手続き期限（5月）との関係上、派遣学生が本学入学後、短期間で応募書類を手配する必要があることが募集の上での課題となっている。特にコンソーシアム協定で受験が定められた英語能力試験（IELTS、ケンブリッジ英検、Pearson、TOEFL）について、広報段階から早期の準備・受験を促していく必要があることを課題と認識している。

【特に優れた取組】

本学の教員・若手研究者を中心に長年、研究面で協力体制を築いてきた中央ヨーロッパ大学との間で、学生の派遣に向けた職員の往来も活性化しており、両校の協力関係がより実質化された。フィレンツェ大学、新リスボン大学も含め、次年度以降の学生派遣に向けた実務レベルでの情報共有を進めることができた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計3	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計4	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (C=小計3+4)	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

② 外国人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (D)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する実績の割合 (D/C)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

初年度にあたる2019年度には、受入を予定していなかったことから、主に2021年2月から予定されている学生の受入に向けた準備を進めた。

とりわけ教務に関する事項について、本学でEU側で選抜された学生を正規生として受け入れ、最終的に学位を認定するための具体的な課題の解決に向け、学内での協議を重ねた。一例として、日・EUの複数機関を移動しながら学ぶというプログラムの特性から、入学、履修登録から、修士論文提出に必要な事前手続きまでを本学に来校することなく進める必要があることが課題となった。本件については、参加学生が海外機関に滞在中も本学の教務手続きをオンラインで行えるよう、教務システムの改修を行った。また、12月にCEUに教職員を派遣し、プログラムに参加する双方の学生にとって必要な情報（必要手続き、カリキュラム、履修方法等）をまとめたハンドブックを作成することに合意し、その素案づくりに着手した。

2～3月にはEU側での募集が始まり、参加者の選考プロセスに入ったが、本学入学者の選抜でもあることから、代表教員がEU側のメール会議、ビデオ会議に参加し、学生の選抜・受入に向けた共通認識の確立に努めた。EU側応募者の出身地、経歴、学問的バックグラウンドが、当初の想定をはるかに超えて多様であったことを踏まえ、本学の教育・生活支援体制を再検討していくことが次年度以降の課題となる。

【特に優れた取組】

日・EUの複数機関をめぐりながら学ぶという本プログラムの特性を最大限活かすべく、教務関連の手続きのオンライン化を推進した。また、中央ヨーロッパ大学と連携しつつ、カリキュラムや履修等、本学での学びや生活について包括的に説明するハンドブックを作成することを決定し、準備作業に着手した。

(3) 本事業における日-EU共同学位プログラムの構築数

① 本事業で計画している共同学位プログラムの構築目標

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	4 件	0 件	0 件	0 件
ジョイント・ディグリー	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件
ダブル・ディグリー	0 件	4 件	0 件	0 件	0 件

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件
ジョイント・ディグリー	0 件	件	件	件	件
ダブル・ディグリー	0 件	件	件	件	件

③ 共同学位プログラム構築の進捗状況のコメント

共同学位プログラムの本格始動に向けて、10月以降、コンソーシアムを構成するEU側大学と、カリキュラム、単位互換、成績評価、学位認定等の共通の枠組みの策定に向けた協議を重ね、1月に、カリキュラムの指針、4大学での履修計画や授業内容等、共同学位プログラムの全容を定めたコンソーシアム協定を締結した。

これに基づき、本学において新たに提供することになる必修科目のシラバス案を作成し、既存の科目（英語開講科目）を含め、選択必修科目・選択科目候補の選定・企画を行った。また、実習、見学等を伴う新規設置科目につき、新たに設置されたプログラム実行委員会において検討し、代表教員数名がワークショップ型授業やインターンシップ先の候補となる博物館を訪問し、具体的なプログラム案について情報収集や意見交換を行った。COVID-19の影響を踏まえ、今後、特に実習や見学を伴う授業の実施方法や、インターンシップの具体的な実施案については、さらに検討を重ねていく必要があるものの、本学が提供するカリキュラムの骨格は定まった。

コンソーシアム各校においても同様の準備作業を進め、2月、パートナー機関の教職員を本学に招聘し、各校における準備の進捗や課題についての情報共有、意見交換を行った。成果として、各校の代表者が、必修授業のシラバス案やカリキュラムの構想について発表し、プログラムの方向性や教育の質保証についての合意が形成された。また、見学・実習を伴う授業の対象となる博物館やモニュメント等を中心に、各都市・各大学の特徴を紹介することで、プログラム全体における各校・各都市の意味付けについて相互に確認した。また、会合の後には、大学近隣地域の「公共圏における歴史」に関する史跡や、インターンシップ先の候補となっている博物館などを見学し、本プログラムの特徴である大学内にとどまらない教育のあり方、社会とのかかわり等について認識を共有した。

2～3月、カリキュラム整備を分掌する本学代表教員を中央ヨーロッパ大学に派遣し、授業やインターンシップについて協議したほか、次年度6月に本学で予定されるシンポジウムの企画について、打ち合わせを行った。

【特に優れた取組】

2月にEU側大学の教職員を本学に招聘し、各校におけるカリキュラムの準備の進捗や課題についての情報共有、意見交換を行った。初年度中にコンソーシアム協定による枠組みの確立から、具体的な教育内容での方向性の統合、質保証へと協力関係を深化させることができた。

(4) 任意指標

① 本事業で設定している任意指標

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1)					
(指標2)					
(指標3)					
(指標4)					
(指標5)					

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1)					
(指標2)					
(指標3)					
(指標4)					
(指標5)					

③ 進捗状況のコメント

該当なし

【特に優れた取組】

大学の世界展開力強化事業（令和元年度採択）

令和2年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	○豊橋技術科学大学, 宇都宮大学, 千葉大学		
主たる交流先	EU		
事業名	近未来クロスリアリティ技術を牽引する光イメージング情報学国際修士プログラム		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった 場合のみ記入	(氏名)	中内茂樹	(所属・職名) 副学長（国際連携担当） 情報・知能工学系 教授
	(交替年月日)		
海外相手大学追加調査分 相手大学名 ※追加調査を提出した 大学のみ記入	大学名		国名
	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
10			
大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL ※日本学術振興会ホームページにおいて、各事業のリンク先として使用			
https://imlex.tut.ac.jp/			

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で各1ページ以内】

本事業における2019年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

プログラムの内容

○学内のプログラム運営管理・実施体制の整備

「国立大学法人豊橋技術科学大学世界展開力推進室」を設置（室長：本事業責任者（国際連携担当副学長））し、事業実施の企画立案、学内外の関係大学、連絡調整、活動実施を行うための体制を整備した、また、事業実施のための専任職員を配置した。この室の4月入学者については、修業年限を2年6月とする学則改正を行うとともに、プログラムの実施に関する規程を制定し、2020年度の学生受入に向けた学内ルールが整備できた。学内の体制が確立できたこと及び専従の職員を配置したことにより、事業実施がより円滑に進められることが期待できる。

○欧州3大学とのコンソーシアムの設置及びEU側との事業実施枠組みの整備

欧州3大学とコンソーシアムを立ち上げることにより、欧州との国際共同教育プログラムを実施する体制が確立できた。カリキュラム、学生募集内容、日程、基準・選考方法及び参加費・授業料の徴収・免除、連携大学・企業の役割等に関して、エラスムス事業での枠組みでのルールを踏まえながら協議を行い、EU側との事業実施枠組みであるコンソーシアムアグリーメント案を策定することができた。

○第1回目の学生募集・選考

第1回目の学生募集をEU・本学側で実施し、欧州側から101名の応募者から29名、日本側（本学）は8名の派遣候補者を選考した（最終的には欧州側11名、本学8名を選考）。

○現段階の課題

新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中、日本からの学生派遣時期が確定できないこと、教職員の相互派遣の延期等、当初計画からの活動変更をせざるを得ない状況。

EU側の奨学金にはEU以外の国籍に学生に奨学金を付与することが可能となっている一方で、日本側は、日本人のみの国籍限定がJASSOの奨学金付与の条件となっている。日本側から本学に在籍する外国人学生（留学生）を参加させる場合、奨学金支援ができない制度となっている。

【特に優れた取組】

本プログラム実施に向け、学内体制を整備するため、修業年限に係る学則を改正し、学生受入に向け、規程を制定し、学内ルールを整備した。

(2) 特記すべき成果

○事業実施のためのコンソーシアムを設置し、Academic and Management Board(AMB)及びQuality Assurance Board (QAB) を設置し、各ボードのミッションを以下のとおり定めた。また各コンソーシアム構成大学からAMB及びQABボードメンバーを配置した。

・AMBのミッションは、プログラムのアカデミック関係を決定・管理及び学生選考、学生履修管理等を行う。

・QABのミッションは、プログラムの質保証ポリシー策定・実施、モニタリング、質保証促進等を行う。

○第1回目の学生応募について、EU側と連携して行い、EU側から100名を超える応募者を得た。日本側からは8名の候補者を確保し、3月にベルギーにおいて、EU側と合同で、第1回AMBが開催し、学生選考を行った。本会議では、本学から8名の学生及びEU側から募集のあった101名の学生から8名の合格候補者及び21名の補欠合格者を選考した。

2. 交流学生数の実績等 【(1)～(3)はそれぞれ1ページ以内, (4)は2ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計1	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計2	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (A=小計1+2)	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

② 日本人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (B)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する実績の割合 (B/A)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

EU側とカリキュラム, 学生募集内容, 日程, 基準・選考方法及び参加費・授業料の徴収・免除等に関して, エラスムス事業での枠組みと日本側の教務, 事業枠組みに関するルールとの調整のための協議を行い, 第1回目の学生募集・選考を実施した。本学では8名(内1名は留学生)の申請があった。申請者8名に対し, 書類及び面接選考を行い, 申請者8名を参加学生として選考した。3月にベルギーで行われたAcademic and Management Board (AMB)で選考した8名全員がプログラム参加者として承認された。

計画していた8名の学生の派遣は達成出来る見込みであるが, 目標人数を超える履修希望者を募るため, 学生募集にかかる事項(募集要項の確定, プログラムの周知及び学生募集説明会の実施)を昨年度より早い時期に行い, 学内での学生選考も2か月ほど前倒しで行うことで, 3月に行われるAMBでの学生最終選考に余裕を持って学生を推薦することとする。

【特に優れた取組】

学内で学生募集説明会を実施し, 周知に努めたため, 優秀な学生の申請があり, 8名の履修学生を獲得できた。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計3	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計4	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (C=小計3+4)	0 人	8 人	8 人	8 人	8 人

② 外国人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (D)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する 実績の割合 (D/C)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

EU側とカリキュラム、学生募集内容、日程、基準・選考方法及び参加費・授業料の徴収・免除等に関して、エラスムス事業での枠組みと日本側の教務、事業枠組みに関するルールとの調整のための協議を行い、第1回目の学生募集・選考を実施した。EU側で学生を募集（2019.12～2020.1）したところ、EU圏及びEU圏外の国から101名の申請（116名の申請があったが、15名に書類不備があり審査外となった）があり、本プログラムへの関心の高さが窺えた。2020年3月にベルギーで実施したAcademic and Management Board (AMB)において、29名（内21名は補欠採択）をプログラム履修候補学生として選考し、最終的に10か国11名の学生の参加が決定した。プログラムへの関心は高いが、残念ながらパートナー大学からの履修者がいなかったため、パートナー大学内にも、広報資料やウェブサイトを充実させプログラムを周知し、学生の受入を行っていく。

【特に優れた取組】

エラスムス事業での枠組みと日本側の教務、事業枠組みに関するルールとの調整のための協議を行い、第1回目の学生募集・選考を実施することができた。

(3) 本事業における日-EU共同学位プログラムの構築数

① 本事業で計画している共同学位プログラムの構築目標

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	2 件	2 件	2 件	2 件
ジョイント・ディグリー	件	件	件	件	件
ダブル・ディグリー (※)	件	2 件	2 件	2 件	2 件

※ 本プログラムではマルチプルディグリー

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件
ジョイント・ディグリー	0 件	件	件	件	件
ダブル・ディグリー	0 件	件	件	件	件

③ 共同学位プログラム構築の進捗状況のコメント

「近未来クロスリアリティ技術を牽引する光イメージング情報学修士プログラム (IMLEX)」を実施するため、日本側大学 (本学：フルメンバー、宇都宮大学及び千葉大学 (アソシエートメンバー) と欧州3大学 (東フィンランド大学(UEF),サンテティエンヌ・ジャンモネ大学(UJF),ルーヴェンカトリック大学(KUルーベン大学)) との間でコンソーシアムを設置し、プログラム実施ための組織及びプログラム評価のための組織を設置し、構成メンバーを特定した。各大学がプログラムで設定する科目・科目内容、担当教員を配置した。

学修成果、(Learning Outcomes)、成績管理については、欧州側の教育の質の保証の考えを参考にしつつ、Quality Assurance Board (QAB) を主体として行うこととし、更に協議を行うこととしている。なお、コンソーシアムアグリーメントについては内容については、合意に至っているものの、新型コロナ感染症拡大の影響で署名は新年度以降となった。

【特に優れた取組】

エラスムス事業での枠組みをベースにしつつ、プログラムの教育内容、学位審査、単位換算、日本人学生の選考方法 (入学予定者からプログラム履修生を選考する方法)、欧州側学生の日本の入学資格等の教務面、また、プログラム参加料・授業料、奨学金等の財政的事項を合意した。

(4) 任意指標**① 本事業で設定している任意指標**

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1) EU 留学生数	29	41	52	56	59
(指標2) EU への派遣学生数	25	31	37	43	50
(指標3) EU からの教員受入数	10	15	20	25	30
(指標4) EU への職員派遣数/ EU からの職員受入数	2/2	2/2	4/4	4/4	4/4
(指標5) 協力企業関係者数	6	12	18	18	18

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1)	23				
(指標2)	31				
(指標3)	5				
(指標4)	7/2				
(指標5)	8				

③ 進捗状況のコメント

豊橋技術科学大学はドイツ（シュトゥットガルト大学）・フィンランド（東フィンランド大学）とダブルディグリープログラムを実施しており、継続して長期で学生をEU諸国へ派遣している。また学部4年次に必須科目としている「実務訓練」でもEU圏での大学での実習を希望する者が多く、2019年度は本学からの派遣学生数は指標とした人数を上回っている。また、東フィンランド大学（UEF）とは職員交流も行っており、昨年度はUEFから1名の職員を受け入れた。本事業採択により、関係事務職員をパートナー大学との打合せのため教員と共に派遣した。EUからの教員受入数が指標値を下回っているが、コロナ禍の状況を見ながら、パートナー大学から教員を招へいし、共同指導やセミナーの開催を予定している。

【特に優れた取組】

本事業以外にもEU圏との交流事業があり、継続して学生をEU圏に派遣するプログラムを有している。

大学の世界展開力強化事業（令和元年度採択）

令和2年度フォローアップ調査票

大学名 (○が代表大学)	慶應義塾大学		
主たる交流先	EU		
事業名	Japan-EU高度ロボティクスマスタプログラム(JEMARO)		
事業責任者 ※交替年月日は変更があった 場合のみ記入	(氏名)	村上 俊之	(所属・職名) 慶應義塾大学理工学部・教授
	(交替年月日)		
海外相手大学追加調書分 相手大学名 ※追加調書を提出した 大学のみ記入	大学名		国名
	1		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
10			

大学の世界展開力強化事業に係る大学作成ウェブサイトのURL
 ※日本学術振興会ホームページにおいて、各事業のリンク先として使用

<https://jemaro.st.keio.ac.jp/>

1. 取組内容の進捗状況 【(1)と(2)で各1ページ以内】

本事業における2019年度の取組内容について記入してください。

(1) 取組の進捗状況を踏まえた、各観点における現段階の課題と今後の展望

プログラムの内容

国際共同研究を中核とした高度ロボティクス教育を実現する国際共同修士プログラムであり、慶應義塾大学大学院理工学研究科と欧州の三大学（フランスEcole Centrale de Nates、イタリアUniversity of Genoa、ポーランドWarsaw University of Technology）の連携によるダブルディグリープログラムである。JEMAROが目指す人材は、次の2点にある。

- ①異なる文化圏の背景を理解し、国際共同プロジェクトの中で中心的役割を果たすグローバルエンジニア
- ②当該分野を俯瞰的に理解する高度な専門知識を持つエンジニアリングマネージャ

【特に優れた取組】

JEMAROは10年来の歴史を持つEMAROの発展版として構成されたDDプログラムであり、EU三大学の教育プログラムの連携が強だけでなく、慶應義塾大学との連携も強く修士研究の共同指導体制が組まれている。EU三大学のロボティクスに関する科目については、EMAROでの教育経験に基づいた発展版となっており、また慶應義塾大学の科目については2003年よりスタートした先端科学技術国際コースの科目群から選択することになっており、学生にとって分野的に広がりのある科目選択も可能なシステムとなっている。

(2) 特記すべき成果

2020年9月から開始する新規プログラムであるが、2019年1月31日締切の応募では428人の申請があり、最終的に9名の合格が承認されている。また、日本人学生も2020年度の達成目標数2名に比較して、5名の応募者及び合格者となった（のち新型コロナウイルス感染症の影響により2名辞退）。

合格者の選別においては、既に完了しており、EUと慶應義塾大学で定めた共通の基準が設定され、双方に評価を行う体制を確立している。初年度であったため、一部の評価はEUと日本で別々に行ったが、次年度に向け全ての評価を統合化することで合意を得ている。

JEMAROの1年目については、コンソーシアムで協議を行った科目をベースとしたプログラムが組まれている。残念ながら、COVID-19の影響で2020年9月スタートのプログラムはオンラインでのコース履修を予定している。また、2年目の研究活動に向けて、合格したJEMARO学生の日本側の指導教員については既に決定済みとなっている。

2. 交流学生数の実績等 【(1)～(3)はそれぞれ1ページ以内、(4)は2ページ以内】

(1) 本事業において海外に留学する日本人学生数の推移

① 日本人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計1	0 人	2 人	4 人	4 人	8 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計2	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (A=小計1+2)	0 人	2 人	4 人	4 人	8 人

② 日本人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (B)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する実績の割合 (B/A)	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（派遣）の進捗状況のコメント

2019年はプログラム準備期間と位置づけ、2020年9月より本格的な相互派遣・受入開始となる。JEMAROの公募案内については、EU側、日本側において2019年12月より公開し、応募締め切りを2020年1月31日とした。全体の応募者数は433名（日本人5名）であった。日本側においては、初年度の公募ということもあり、慶應義塾大学からの5名の応募者について事前に口述試問を行い、JEMAROに対する応募者の理解や適正についての確認を行った。この結果をEU側へ報告を行い、最終的にはコンソーシアムメンバー全員で共通の評価基準による評価を行った。評価の項目としては、CV(履歴書)、Motionvation Letter(JEMAROへの応募動機)、Quality of Institution(卒業大学の評価)、Recommendation Letter(第三者からの推薦書)、Relevance and Transcript(成績票およびJEMARO分野との関連性)、英語能力の6項目になる。コンソーシアムメンバーの評価に基づいて、3月に開催されたEU各大学との合同選考会を経て、最終的な合格者を決定している。当初日本人学生合格者は5名であったが、COVID-19の影響により2名の辞退となっている。9月よりEcole Centrale de Nantes(フランス)に1名、University of Genoa(イタリア)に2名派遣予定であったが、COVID-19の影響で、いずれの大学でもオンラインによる授業の実施を予定している。オンライン授業については、各大学のシステムに準じており、ECNは2020年9月7日、UniGeは9月21日、Warsaw University of Technology(ポーランド)は10月1日を開始日としている。オンライン授業は少なくとも1st Semesterで実施し、コロナ禍の状況が改善された場合には2nd Semseterからの現地の派遣を積極的に検討することでコンソーシアム内の同意を得ている。

【特に優れた取組】

日本人応募者を多く得るためにJEMAROに関する情報発信を積極的に行っている。EU側とは別に日本語によるJEMARO情報発信のためのWebサイトの開設、また2019年12月および2020年1月に説明会を実施している。慶應義塾大学内では、JEMARO学生が希望した場合の受入れ候補教員について23名の教員から既に了解を得ており、その候補教員の研究室所属各学生へもJEMARO情報を積極的に伝達している。次年度の学生については今年度秋学期に広告チラシの配布を予定している。

(2) 本事業において受け入れる外国人学生数の推移

① 外国人学生数の達成目標

●申請時の計画調書記載人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計3	0 人	0 人	14 人	12 人	12 人

●海外相手大学追加調書分

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
小計4	人	人	人	人	人

●合計人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (C=小計3+4)	0 人	0 人	14 人	12 人	12 人

② 外国人学生数の実績

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計人数 (D)	0 人	人	人	人	人
達成目標に対する 実績の割合 (D/C)	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%

③ 交流プログラム（受入）の進捗状況のコメント

2019年はプログラム準備期間と位置づけ、2020年9月より本格的な相互派遣・受入開始となる。
 全参加学生を1年目は欧州各大学(ECN/UNIGE/WUT)で受け入れ、2年目を慶應義塾大学で受け入れるプログラムであるため、2021年9月より9名受け入れる予定である。外国人学生の受入れにおいては、慶應義塾内の受入れ指導教員の取り決めが重要となるが、2019年度において受入れ可能な指導教員の候補者選定を行い23名の候補者より受入れ了解を得ている。候補者は機械工学科、電気情報工学科、システムデザイン工学科、情報工学科、生命情報学科から得られており、ロボティクスに関連する幅広い分野を網羅している。2020年度9月よりスタートする初年度のプログラムでは日本人学生を含む12名の学生受入れが決定しているが、全ての学生の受入れ指導教員が既に決定している。初年度はEU三大学の何れかの機関に所属することになるため、実質的な指導は2021年9月からとなるが、修士論文の研究実施に向けてEU側の共同指導教員の調整を依頼している。EU側の状況については随時連絡を取り合うことを前提としているが、オンライン授業の状況を含め、2020年10月にコンソーシアムでの会議の開催を予定している。外国人の受入れにあたって語学教育も重要となるが、慶應側の修了要件には通常の語学科目を含めることができないため、日本文化を学ぶことを中心とした科目として、"Science and Technology in Japanese Culture"を設置する予定としている。

【特に優れた取組】

修士論文の慶應側の指導教員は既に決定しており、EU滞在の1年目においても研究に関する打ち合わせを行える体制を整えている。また、各教員が関係する領域を3つの分野（1st choice: Control, Mechatronics, 2nd choice: Robotics, Human Interface, 3rd choice: Signal Processing, Biological Information）に大別することで、EU側の共同指導教員の取り決めを行いやすい体制を整えている。

(3) 本事業における日-EU共同学位プログラムの構築数

① 本事業で計画している共同学位プログラムの構築目標

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	1 件	1 件	0 件	0 件
ジョイント・ディグリー	0 件	0 件	1 件	0 件	0 件
ダブル・ディグリー	0 件	1 件	0 件	0 件	0 件

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
合計件数	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件
ジョイント・ディグリー	0 件	件	件	件	件
ダブル・ディグリー	0 件	件	件	件	件

③ 共同学位プログラム構築の進捗状況のコメント

ダブル・ディグリーでは、EUの3大学と慶應義塾大学大学院理工学研究科の研究活動を中心とした共同研究体制を構築し、共著での論文発表も行える研究者育成を目標としている。特に、EU側の実践的なプログラムを習得できるカリキュラム設定としつつ、互いに研究活動も活発に行いやすい体制づくりのために、1人の学生に対して日本・EUそれぞれの指導教員を置いている。慶應義塾大学大学院理工学研究科には、既に3年で修了できるダブル・ディグリー・プログラムがあり、授業科目や研究科目については、既存のものをそのまま活用できる。ダブル・ディグリーのための修了要件としては、EU側機関において120ECTS、慶應側において30単位の取得が必要となる。このために次の事項について検討を行い承認を得ている。

- ① 1年目のEU側滞在時には60ECTSを科目履修し、同時に慶應側指導教員との研究に関わるディスカッションをWeb会議により実施することで、慶應側の単位としても10単位相当の認定を行う。
 - ② 2年目の慶應側滞在時に科目履修（14単位）および修士論文（6単位）を履修し、同時にEU側の共同指導教員との研究に関わるディスカッションをWeb会議により実施し、またEU側との論文審査を実施することで、EU側の単位としても60ECTS相当の認定を行う。
- 上記において、慶應側指導教員とEU側共同指導教員との実質的な指導体制については、今後の協議を必要とする点はあるが、慶應側指導教員候補者の領域ごとの大別は行えており、EU側共同指導教員を含めた共同指導を実施しやすい体制は整えられている。

【特に優れた取組】

JEMAROプログラムへの出願時に、出願者には希望する研究領域および指導教員候補を選定することを条件としており、JEMAROへの受入れが決まった段階で、慶應側の指導教員も決まるシステムとなっている。領域および希望指導教員については、第1位から第3位までを選定することになっており、特定の領域や指導教員に希望が集中した場合には、調整が行える体制となっている。2020年度の受入れ学生については、一部調整を行ったが、第3位までの希望範囲内で調整が行えている。

(4) 任意指標

① 本事業で設定している任意指標

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1)					
(指標2)					
(指標3)					
(指標4)					
(指標5)					

② 2019年度末における目標の達成状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
(指標1)					
(指標2)					
(指標3)					
(指標4)					
(指標5)					

③ 進捗状況のコメント

該当なし

【特に優れた取組】